

人、自然、アートと街をつなぐ

左京変人図鑑

第3号
FREE

左京区に関わる素敵な変人インタビュー

左京区の「場」を 発酵して育む変人

パーカッショニスト
地域プログラムディレクター
スズキ キヨシ氏



左京区の「場」を発酵して育む変人



東日本大震災を機に左京区に越してきてから、左京いきいき市民活動センターのスタッフとして、盆踊り大会を復活させたり、「かもがわデルタフェスティバル」を開催したり、左京の音楽にまつわるイベントを数多く企画してきたスズキキヨシ氏。どのように音楽イベントをしてこられたのか、東京ではどんなお仕事をしておられたのか伺ってみました。

スズキ キヨシ氏

プロフィール

音楽を「おんらく」楽器を「らっき」と位置づけ、つねに「楽しさ」の視点から、オーガニックなサウンドとグルーヴを追求するパーカッションist・音楽講師。1970年代から始めたミュージシャンとしての音楽経験、音楽療法や社会福祉施設での豊富な講師経験から生まれた柔軟な発想で、幼児からお年寄りまで、さまざまな人たちに「音楽の入り口」をわかりやすく伝えている。2011年、神奈川から京都市左京区に移住。2012年から2015年まで京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）の講師を務める。2015年よりNPO劇研の地域プログラムディレクターとして、音楽による地域社会の活性化に努めている。

——これまでのお仕事について教えてくださいいただけますか？

打楽器を主とした楽器奏者として、さまざまな音楽のステージ、レコーディング、芝居の生演奏に携わってきました。活動の拠点は、新宿、池袋など。20代でアングラ劇団「発見の会」の芝居に間わり、バンド「浪ざ知らズ」や俳優の田口トモロヲなどと繋がった。1980年ごろ、知人が葉山に海の家オアシスを作った。普通の海の家と違って、夕方から夜だけ営業するスタイル。そこを通じて、アーティストとの繋がりが増え、海外のミュージシャンをブックキングする会社とつながり、活動の拠点は青山へ。ワールドミュージックとの繋がりがもできた。アメリカから数十人の太鼓のチームが来日すると、彼らは自分の家族だけじゃなく、村というコミュニティごと養わなければいけない。楽器はもちろん服や雑貨を持ち込み、公演の合間に売り、手ぶらで帰る意気込みだった。海外の民族楽器が手に入りにくかった時代、そんな環境にいたのでほしかった楽器を手に入れ、叩き方も教えてもらえた。楽器を持っていただけで仕事が取れる時代。民族楽器でレコーディングに携わった。数年後、音楽療法が浸透し始め、湘南の福祉作業所と間わり、いっしょ

にバンドを組んだり高齢者施設に行ったり、音楽経験のない人との間わりが増えてきた。打楽器はコミュニケーションも取りやすい。障がいのある人たちの反応は初めての体験だらけ。非常に刺激的で見たことのないものだったし、いっしょにやっていたいと思っただ。ワールドミュージックに関わったおかげで「音楽は特別なものではなく環境のなかで当たり前にあるもの」という感覚が自然と身についたんでしょね。そこから身近な素材や廃材で楽器を作るという需要が生まれ、挑戦してみた。海の家で海岸清掃して拾ったものを、海岸で焚き火をして燃やす。そこで音楽もする。仲間とセッションしながら、いろいろなものを楽器にして、どんな音が出るか試す。おかげで書籍を出せることになった。廃材楽器のワークショップの仕事ももらえるようになり地方への移動が増えた。フジロックフェスティバル、ap bank's、アースデイなどのファミリ

エリアや環境系エリアに関わり、親子向けの楽器づくりや音遊びの体験型のワークショップを提供していた。海の家オアシスのみならずと盆踊り大会も開催しました。——活動を通してどんなことを伝えてこられましたか？
なにかを伝えたいというより

も、音を通じて「どんな現象が生まれるのか」というのを見た。イベントに企画意図はあるけれど、そこに人の「評価」というものがあつたら現象を楽しむということはできないよね。一度でも繰り返せば、リズムというものは生まれる。それに合わせないでいるよりは、合わせたほうが楽なんですよ。宇宙の真理だと思えます。そのリズムに乗っかる、同調する。そうして、歌ったり踊ったりしていくと、なにが起こるか。イベントをするときも、自分の視点だけじゃなく、全体に響き合うなにかを考慮しているのかもしれない。子どもにとってこの音はどう聴こえるんだろう？ 普段、音楽に触れていない人にとっ

てはこの音楽はどう捉えられるんだろうか？といった具合に、多面的に捉えていた。ライブハウスなど、音楽が好きな人が集まるところで楽しさもあるんだけど、「音楽なんか嫌いよ」という地域のおばあさんが、それでも盆踊りで踊ってくれる。そういう体験をいっしょにすることに、僕は喜びを感じます。嫌いだけと踊る。ということば、きつとどこかに接点があるということ。その接点である「共通言語」のようなものを見つけるのは楽しいですよ。——京都に引越したきっかけは

東日本大震災でしようか？
そうですね。ap bank'sで知った人のご縁から京都芸術大学こども芸術学部と繋がりました。地域の親子との間わりが生まれ、廃材楽器づくりの講師をしたり、親子向けのワークショップをしたりしました。その後、2015年にNPO劇研が左京東部いきいき市民活動センター（以下いきせん）の指定管理者者になったとき職員に誘われ、盆踊り大会の経験を活かして「復活！ 錦林盆踊り大会」を企画開催。2017年から2019年まで「ようせい夏まつり」を開催しました。「ようせい夏まつり」は17時から3時間のステージがあり、20時から盆踊りをして21時終了だった。ところが、準備も当日も暑くて大変。本番当日は700人ほど来て盛り上がるけれど、とにかく暑過ぎて熱中症で倒れる人も出て救急車を呼ぶこともあった。ステージへの出演希望者も増加し、別の方法を検討しているうちに、コロナが来て2年開催しないで過ごした流れから「かもがわデルタフェスティバル（以下デルフェス）」として秋開催へと移行することに。

——「かもがわデルタフェスティバル」という名称の由来は？
川の向こうも含めて出町柳から元田中あたりまで、この地域一帯

を巻き込むという意味を込めています。実行委員会決めました。——デルフェスの実行委員はどんな方ですか？
養正学区の住民、まちづくり団体の方など20〜70代まで約10名。「多文化共生」をテーマにした文化イベントを通じ、よりよい地域づくりを目指しています。まちづくりサポーターの輪を広げたいと思っていて、今年はオリジナルグッズもつくりました。開催期間は10月1〜16日とし、15日に「多文化まつり」としてステージを13〜19時、盆踊りを19時から開催しました。事前に、盆踊り練習会も開催。今年は京都大学でも、5月、7月、11月に熊野寮で、8月に吉田寮でお祭りが開催され、盆踊り大会をしました。盆踊りをつないでいっているのです。熊野寮では、江州音頭の研究をしておられる京都芸術大学の下村先生の協力を得て、オリジナルの音頭づくりをしたので、そのサポートもしました。まつりの設営も協力して、みんなでカルチャーを作る。この地域は高齢化、少子化問題がある一方で、突出して20代の学生が多い。そのバランスを活かして、まちづくりの一環として、こうしたお祭りを継続していけたらおもしろいかなと思っています。今後は留學生たちにも、こうした役割や居場所を

※文化芸術を通した人材育成、芸術支援、まちづくり事業など社会に貢献する事業を展開している



2022年のかもがわデルタ
フェスティバルでの多文化
まつりには出演者150人、来場者800人が集まった

提供して「一緒にやろうよ」ということができる、もっと、おもしろくなるだろうと思います。
——学生寮のまつりと関わることになったきっかけは？

くまのまつりの実行委員の長谷川くんに依頼されたのがきっかけで、毎年、声をかけてもらっています。僕が関わる別のイベントでも「タテカンみこしワークショッブ」などで出てくれて、ライブペインティングで楽しませてくれました。すごく評判もよく多世代交流が生まれます。それが祭りに置き換わると、タテカンでなにか違うものが作れるよねと。大きな作品を作るには、大きな倉庫を借りるなど環境も難しくなっ

継続していくと時間の経過と共に変化が生まれるが それに合わせてこちらも変化していく

てくる。でも熊野寮だと、そういうものも作れる。学生寮があつて寮生がいてこそできること。地域の特徴だと思えます。地域というものはすべて必然、必須です。劇研がおこなっているのは、文化芸術アートを通した出会いと交流の場を提供するまちづくり事業。僕も、そういう活動、あるいは支援をしています。盆踊りなどのイベントをしながら、地域のみならずと一緒に楽しむことを目指してきました。最初は、うまくいかなかったこともありましたが、実績を重ねるなかで、試行錯誤しながら10年かけて地域の人と関係を築いてきました。西部いきセンの向かいの「左京西部高齢者ふれあいサロン（以下サロン）」でも、アートの提供、子ども服の交換会など実施していますので、この場をどう活用するか、いろいろな方と考えて関わってもらえたらと思っています。このサロンも地域の私たちと三方よしの状態を探り、多機能な拠点となるようにと着手しました。ソファ席に普段ならおじいちゃんおばあちゃんが数人いて、テレビを見たりしてくつろいでいるんです。

——京都精華大学のサコ先生がおっしゃる中庭文化のようですね。

そう。大きな家族みたいな感じになれたらおもしろいよね。子ども

もたちにとって、よその大人と話すきっかけになればとも思っています。環境問題、多世代、多文化、アート、それらがごちゃ混ぜに集まり発酵していく。そのための拠点となるステーションをあちこちに作る。財政問題などもあるかと思いますが、こういうところに予算をかけてサステナブルな社会を作っていくといいですよ。興味のある人みんなに視察に来てもらって、サポーターになってもらえたらうれしいです。さまざまな方と関係性を築くには、熱量がそれぞれ違うと思うけど、それぞれのやり方で関わってもらえたらいいと思っています。

——通常、イベントなどを通して人と関わるのとトップダウンになりがちですが、キヨシさんの周囲の方は自主的に動いてますよね？
主催側の思い通りにはいくわけがないと思っていて、それは障がいを持った子どもたちから学んだことです。椅子をきちんと並べて、全員が座ってイベントが始まる。でも、そこからだんだんステージに近づいてくる子がいる。そのうち、ステージに手をかけていたかと思うと、そこで寝てしまっただけで、それは、その場で振動を楽しんでいるのかもしれないよね。背中を向いて聞いている子ども、本当に嫌なら出ていくのだ

ろうし、もしかしたら背中を音で聞いているのかもしれない。その子にとって気持ちのいい姿勢が背中を向けて聞くことなのかもしれない。音楽をやってみて、そこできか起こっている。打面の半分でドラマチックなことが起きている。そこで自分も叩きながら音が変化していく。これって「現象」であって、こちらが「どうしたい」という話ではない。でも、それが自分にとってもすごくいい経験になったし、貴重なことだと捉えています。

イベントでも、それぞれ動いている人同士が関わっていく。僕は、基本、同時多発が好きだから、ほどこよい距離感を持ちつつ「なにかおもしろいことをしているな」と気づいたら関わる。関わるのが得意じゃない人もいるよね。そういう意味では、表現活動しているアーティストは、障がい者子どもたちと、感覚でどんだん関わろうとするし、感性が豊かですよ。——くつきたいときにくつきたい、違うと感じたら離れる。

それが基本だよ。そのほうが絶対、おもしろい。こうした活動は、個人でできることではなく「どれだけ人の手を借りられるか」が課題です。それぞれ「点」でやってきたことが繋がって、束ねていく時期なのかなと思います。「か

もがわデルタフェスティバル」は、その集大成という感じです。昨年、長谷川君からくまのまつりでの盆踊りの依頼があったとき、なぜかいつもの音頭バンドのメンバーのスケジュールがごとくとく合わなかった。ピンチはチャンスということで、新たにいろいろな人をどんどん巻き込んでみようと思った。関わるメンバーを流動的にすればするほど、経験者は増える。それが一堂に集まったときにおもしろいことになる。例えば、熊野寮の秋まつりでは、熊野寮生による音頭バンドがデビューすることになった。さらに音頭取りにも寮生が手を挙げた。そんな新たな展開が生まれました。時間の経過で変化していくのがおもしろいなと思います。継続しているゆえのおもしろさ。例えば、個人のバンドがプロミュージシャンを目指し時間とともにある程度上手になったとしても限界がある。いくらでも凄い人はいるし、「上手になる」という目標はいつか限界が来る。でも、別のベクトルとして「音楽隊シャボン玉ホリデー」のような地域の楽団に関わると、素人の爆発力といったおもしろい体験ができる。地産地消の音楽によって地域を活性化します。そういうのがいいなと最近思います。音楽は、一番いろいろな世代、いろ

いろな背景の人に響く。シャボン玉ホリデーの姿勢がまたいいですね。都合さえ合えばだれでも出演できる。「こんなやり方があるのか」と参考になっています。プロの演奏家として代表の登さん。高校や大学から音楽を続けているセミプロ、そして、始めたばかりの初心者、みんなシャボン玉ホリデーのメンバー。かけ出しの人は、上手な人に乗っかればいいんです(笑)。デルフェスでシャボン玉ホリデーの曲で最初に踊りだしたのが、ステージに一番に出演した和太鼓チーム。彼女たちと事前に打合せをしたら、そのまま宴会になっちゃって(笑)。でも、そこで意気投合したので、当日はすぐリラックス状態で楽しく演奏してくれた。出演者の人たちとは、ほとんど必ず事前に会うようにしています。

——それがキヨシさんがおっしゃる「発酵」のコツでしょうか？
 そう。当日「この前はどうも」という状態で出演すると、「初めまして」という状態で出演するのでは、特に出演者にとっては全然違う。年齢も背景もごちゃ混ぜのさまざまな人たちとつながるには、メールではなく直接会わないとだめでしょう。後は、コミュニケーションの取りやすい現場をどう作るかという工夫をしています。

す。やっぱり参加型がいい。僕の中ではストーリーがあって、それをイメージして動いています。

——寮生たちが音頭バンドをやるだろうと想定していましたか？
 そもそも盆踊りは、市民に開かれたもので、地域にそれぞれ音頭取りがいたはず。現代なら音頭バンドなど、時代に合った参加型にできればとは思っていた。

継続していくことで変化が起る。それに合わせて、こちらも変化していく。京都では守り続けていこうという事象があるかもしれない。でも、左京はフリースタイルだし、どんどん変わっていく。変化をおもしろがる。そういう価値観がこの地域に育っていくと、子どもたちも含めて「ここではないをやってもいい」「なにも体裁を考えなくて済む」という開放的な感覚が育っていくと思います。



音楽隊
しゃぼん玉
ホリデー

——キヨシさんが大切だと思うことはどんなことでしょうか？
 僕は感じることで、感覚に訴えることが大事だと思っています。心が解放されるときに、いろいろな体裁や立場なんかを、すべて捨てられるような環境や空間、「場」を作れたらと。そのためにはやっぱり子どもがいるという状況も大切。大人は行動パターンがなんとなく似ている。でも、子どもって右往左往して不規則だからおもしろい。そういう要素が「場」に必要なと思っています。常に動き回っていたり、いろいろな音が聞こえたりすると、体裁を考えずに自分を出しやす。そういう環境を、お祭りを作りたい。得意や不得意があって、デコボコでいい。一人でなんでもできる必要はないんだよ。お互いにカバールし合えばいいし、カバールし合える信頼関係を築いていくことが大切。そうすれば、新しい人たちもまた、関わりやすくなりますよね。それぞれが動いたり一堂に集まったり、動きつつも決めない、固定しない、とりまとめない。それが大切だと思います。

かもがわデルタフェスティバル サポーター募集中！



デルフェスではボランティアでお手伝いをしてくださる方を年間通して募集しています！ イベント運営やステージ設営などに興味がある方、盆踊りが大好きな方、告知が得意な方などデルフェスをいっしょに楽しく盛り上げませんか？ ミュージシャン、ダンサー、小学生までイロイロな方と交流できて、これまで知らなかった背景の人と繋がれますよ！

【問い合わせ】

かもがわデルタフェスティバル実行委員会
 kamodelfes@gmail.com 075-791-1836 (左京西部いきいき市民活動センター)

*反原発パレードをきっかけに結成した、だれでも参加できる練り歩き音楽隊



左京区の 生き様アート

一流の芸術家の作品を美術館で鑑賞するのもいいけれど、歩いていてふとした瞬間に出合うアートに心を動かされるような街にしたい。アートには創る人の生き様が表れる。生き様に一流も二流もないはずだ。人がいて街ができる。アートを通して誰かの生き様を感じる街って面白いと思うのだが、どうだろうか。

民族舞踊ダンサー・セラピスト Yuka

ペルシャダンス、タジクダンス、アフガニダンス、ハリウッドダンス、バングラダンス、ウイグルダンス、ジョージアダンスなど世界の民族舞踊を踊るYukaさん。ダンスや運動が苦手な人前に行くことに抵抗があったYukaさんが踊るようになったのは、大学生のときトルコの音楽に興味を持ったこと。トルコの旅行ガイドブックにあったベリーダンスのエ



キゾチックな衣装の美しさに惹かれた。ワークショップ「オーガニックダンス」ではセラピストの知見を交えつつ踊る楽しさを伝えている。

[instagram]

https://www.instagram.com/yuka_dance_and_therapy/



音無の滝

岩場に沿うようにしたたり落ちる滝。その名は、仏典に節をつけた仏教音楽の一つ「声明」に由来する。平安時代後期の天台宗の僧・良忍上人を始めとした「声明法師」たちは、この滝に向かって声明の練習をしていた。初めは滝の音に消されて聞こえなかった声明の音が、稽古を重ねるに従って滝の音と声明の音が調和していき、ついには滝の音が消え、声明の音のみが朗々と聞こえるようになったという逸話があるらしい。高低差は15メートルほど。「呂律が回らない」という言葉の由来となった、呂川・律川という2つの川が流れていて、その律川の上流にあるのが音無の滝。呂川は地元では「ろがわ」と呼ばれている。大原のバス停から呂川沿いに歩いていくと、大原三千院を通り越し、さらに来迎院も通り過ぎて、その奥。バス停から徒歩約30分で自然を堪能できる。

こっそり教えたい
左京自然スポット

左京変人

図鑑編集

部コラム

暮らしのなかの「流れ」を知る

左京変人図鑑 副編集長 藤嶋 ひじり

取材を通して「私たちは大切なことを意外に知らないのだ」と思い知らされることは多い。例えば食べ物、食肉となる家畜がいかに育てられているか、加工食品の原材料など知っているようで知らない。また、自分の身体の機能や臓器のこと。医療関係者以外、学ぶことはほとんどなく、身体に痛みや辛さを感じると医師に頼る。病気になるって初めて、自分の身体に目を向ける。でも、大病でもないかぎり、生活を見直す人は少ない。冷え性の女性が多いが、靴下など温める商品は買っても、原因を探求せず「私、冷え性なんです」で止まっている人が多い。冷え性の赤ちゃんはいない。いつから冷え性になったのか、大人になってからなった人が多いと思う。冷たい飲み物の飲み過ぎ。おしゃべりのための薄着。運動不足。それぐらいいは思いつくかもしれない。義務教育の知識があれば、心臓から血液が身体の末端まで流れていることは知っているはずである。末端が冷たいということは、血流がうまく機能していないのではないかと気づけるのではないか。さらに、「足（ふくらはぎ）は第二の心臓」といった言葉を聞いたことがあれば、ふくらはぎ（腓腹筋）、足首、足の裏を使う動きが、末端から心臓へと血流を戻すために必要であ

ることに気づけるはずだ。暮らしのなかで「歩く」「しゃがむ」と言った足首を動かす動作や、地面を蹴り出す動作が減っていることから、血行不良となり、冷えはもちろん、さまざまな体調不良に繋がっているとは予想できないだろうか。テレビが「一日〇分、つま先立ちのポーズ」などの健康情報を伝えると、視聴者から「角度はどのくらい？」と質問がある。新しい情報に囚われてさらに身体が固くならないか心配になる。大切なのは、不調ならば今よりも身体を「動かす」ことではないだろうか。28歳で冷え性になったとき、私はスクワットをして、足首を使って歩き、食生活を変えて改善した。昨年、また運動不足による血行不良を感じてからは、しゃがむ、背伸びするといった、腓腹筋を動かすバレエ風のエクササイズを編み出し毎日している。この動き、なにかと似ていると思ったら、ラジオ体操！ さすが、よく考えられているものだ。ラジオ体操は、正しくやれば、かなり腓腹筋を使う。「野生の動物」が健康のヒントになる。50年前から循環農法をしている方に取材したときに、そう教わったことがある。野生動物はなぜ健康なのか。毎日動き、住んでいる土地で採れた作物を食べているからだ。現代は、利便性を

追求した結果、世界中で採れたものを食べ、あまり身体を動かさなくても生きていける。乾燥機の出現で洗濯物を干したり取り入れたりしなくなった。エレベーターなどの出現で、階段を昇り降りしなくなった。掃除機の出現で雑巾掛けをしなくなった。ちなみに雑巾掛けの動作は、身体や脳の発達に関係しているという説もある。「教えてもらわなかったからできない」と親や学校に不満を訴えつつ、自ら考え行動する人は少ない。受け身なのだ。知識は与えてもらうものだという固定観念は、日本の教育制度の問題でもあるけれど、そもそも、発想力や行動力が乏しいようにも感じる。知らなくとも生きていける便利な世の中が、人の生きる力を奪っているのかもしれない。昨年12月、家の屋外の排水管が詰まるトラブルがあった。一戸建ての排水は集合住宅より詰まりやすい。以前に詰まったとき、急速依頼した会社に5万円も取られた挙句、原因はわからずじまい。今回は、夫が自分で見てみると言う。その様子を見たお隣さんも見えてくださった。以前、下水の仕事に携わっていた彼のアドバイスで詰まった箇所を突き止め、夫が掘ってみると、木の根が原因とわかった。しかし、夫は翌日から出張。残

された私たちは、数日、コンビニのトイレを借りた。年末にやっと、夫が排水管の取り替え工事をしてくれた。普通にトイレを使えることに感謝の気持ちが生まれた。この一件で気づいたが、自分の家の汚水について、排水処理施設へと流れることは漠然と知っているものの、家の排水管がどこからどこへ向かうか知らなかった。どこから水がやってきて、どこへ流れていくのか。私たちが買うものがどこでどう作られ、使用後に捨てたゴミは、どこでどう処理されて最後はどうなるのか。人間の暮らしにまつわるモノの流れを、知る必要があるのではないか。その流れは一方通行ではなく、地球のために循環されるべきではないのか。そう思っていたら、ごみ減量推進会議、通称「ごみ減」に関われることになった。そろそろまた大きな災害が起こると発信している人もいる。インフラが整った環境で暮らし、困ったら専門家に頼る。そのインフラが失われたとき、水をどう手に入れ、どうやって暖を取り、どう健康を守るのか。地球で生きるために必要な知識と技術を、私たちの多くは得ていない。いまこそ、体験を通してそれを身につけなければ、大自然を前に、想像以上に私たちは脆いのではないだろうか。

左京変人図鑑編集部からのお知らせ



アトリエを探しています！

3年前から絵を描き始めた。最初は上手に描こうとしていたのだが、それがとても苦しくてつまらない。そこで上手下手を気にするのをやめて、考えて絵を描くこともやめてみようと思った。しかし、考えるのをやめるのはとても難しい。思いつきで音楽をかけて踊りながら絵を描いてみた。手に絵の具をつけて身体が動くまま感覚的に描いていく。描くというよりキャンパスを絵の具で汚す感覚だ。すると、私はこんなに楽しく絵を描けるのか、と驚きを感じた。それを多くの人に体験してほしい。大人も子どもも上手下手を気にすることなく、思うままに感性を発揮できる安心できる場を作りたいと考えている。左京区近辺で使っていない倉庫や空き家スペースをお持ちの方はご連絡いただけると嬉しい。



左京変人図鑑編集長 寺嶋 康浩
contact@henjin-zukan.net

TERACY0301



ドラムでダンス部@梅小路公園野外ステージ

プロドラマーの生演奏で即興で自由に踊るドラムでダンス部。元ブルーハーツのドラマー梶原徹也さんの生演奏と一緒に踊りませんか？ 自由に身体を動かす気持ちよさや解放感を味わいに来てください。

日時：3月12日（日）14：00～15：30 ※雨天決行 参加費：3,000円
会場：梅小路公園 野外ステージ 詳細はこちら→ <https://drumdedance.com/>

『左京変人図鑑』は広告ページのない冊子です

私たちは「広告のないフリーペーパー」を作るという試みに挑戦しています。できうる限り中立でフラットな状態で情報発信していきたいのです。そして、この考えに賛同してくださる方からの、制作費用への協賛については大歓迎いたします。ご希望の場合、誌面にお名前を掲載いたします。

『左京変人図鑑』の設置場所を募集中です

『左京変人図鑑』を読んで「うちに置きたい」と思っていただけの方は、ぜひ、ご連絡ください。左京区外でも構いません。「なんだかおもしろそう！」「変人さん大好き！」という方がいらっしゃるような場所に、ぜひとも置いていただければ幸いです。



編集長：寺嶋康浩

左京区在住。デザイナー、コピーライター、ボディワーカー、ダンサー、画家、電磁波環境測定対策士、第二種電気工事士。市民団体「みんなで作る 左京朝カフェ」のスタッフ。鞍馬川のゴミ拾い活動や目的なくゆるりと人と繋がる場づくり「ゆるりつながるカフェ」を月一開催中。

副編集長：藤嶋ひじり

左京区在住。編集者、シンガーソングライター、FM87.0 RADIO MIX KYOTO 旅行ライター、All About コラムニスト、認定心理士、保育士。(株)リクルート『とらばーゆ』編集者を経て、日経BP社、小学館、NHK 出版などで取材・執筆。インタビュー実績1,900人。3姉妹の母。



後援：みんなで作る左京朝カフェ 協賛：猫猫寺開運ミュージアム、北風と太陽
取材協力：パーカッションリスト 地域プログラムディレクター スズキ キヨシ氏

左京変人図鑑の協賛や配布して下さる企業、団体、個人を募集しています。詳しくは以下の web サイトからご連絡ください。

<https://henjin-zukan.net>

